
Flavor of life

ソナチネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Flavor of life

【Nコード】

N2985N

【作者名】

ソナチネ

【あらすじ】

この物語は、「花より男子2」の曲で、宇多田ヒカルさんの「Flavor of life」を聴きながらイメージして書いたものです。

歌詞からいくつかワードをお借りして、それを本作でのキーワードとして

書き進めました。

第一話は哀 コナン、第二話は新一 蘭、第三話は平次 和葉、最終話の第四話は快斗 青子 への気持ちとなっています。

哀 コナン(前書き)

第一話のキーワードは、素直に……、とさよならの後もとけぬ魔法、です

哀 コナン

素直に愛せたらな、っていつも思う。憧れる。私は多分他の人よりも冷めてるんだと思う。灰原哀という子供として見ても、本来の姿の宮野志保という大人として見ても、それは変わらないんだと思う。だって江戸川君もそう思ってるんでしょ？

「ホント可愛くねえよなコイツ。」

って。なんでわかるんだって？だってあなたの視線とか顔ってすごく分かりやすいもの。あなたの日頃の行動見てたら尚更よ。要するに子供ね。何でもかんでも思った事は行動にも態度にも顔にも視線にもすぐ出てしまう。本当に、あなたの中身は高校生の男子なのかしら、ってよく思うのよ。でもね、そんなあどけなさを持つてるあなたが本当に羨ましい。

そして、そんなあなたを私は好きなんだと思う。本当に愛してしまっただんだと思う。あなたに出逢って、初めて愛することのできる幸せがわかった。愛するって意味が解った。江戸川君と一緒に喋ってるよね、すごく楽しいの。話が合うからとかそういう意味じゃない。もっとちがう意味で、ずっと一緒に話したいって思うの。あたしの言ったことで江戸川君が笑ってくれる時、すごく嬉しい気持ちになる。作り笑いじゃなくて純粹に心から面白がってくれたり、楽しんでくれるし。

でもそれと同時にね、恋って息苦しいものなんだって言う事も分かってしまったのも事実よ。あなたが

「じゃーな、灰原。また明日」

って言った瞬間、今日が終わる事をすごく恨めしく思うわ。いつもはきれいな夕焼けさえ疎ましいと思ってしまうぐらいに。いやなのよ、あなたが傍に居てくれないと。

私思うのよ。「さよならの後もとけない魔法」って言うのがあったらいいなって。あなたの声とか、あなたの傍でドキドキする気持ちとか、そういうのがいつまでも残るの。

またあなたに会った時、それはだんだんあなたにも伝わっていくの。ほのかで淡いものよ。少しでもあたしが無理な欲望を抱いてしまえばそれは儚く消える。だから私は今以上あなたを愛することは許されない。そんなものにとらわれるなんて、がらじゃない？うるさいわね。最後まで言わせなさいよ。それでええつと、どうしてかっつて？

だって私には前科があるもの。もう罪を犯してしまってるから、これ以上の欲望で彼を苦しめるのは許されないの。毒薬であなたを江戸川コナンとして生きざるを得ないことにしてしまったこと、それはもうぬぐえない事だわ。今更どうこう言っつて元に戻るものじゃない。

だから私はあなたを愛してはいけない・・・あなたを苦しめた張本人である私は今、また大罪を犯してしまいそうなの。また犯罪者になっつてしまう・・・

・ 叶わない恋なのよ。わかってる、わかってるのよ。・・・でも・・・

罪人になってしまってもいい、って思えるぐらい

私は江戸川君が好きなのよ。

新一 蘭（前書き）

よく考えてみれば、このFlavor of Lifeって、けっこうな懐メロ

なんですね。だって花男2って、去年TBSでやったものですよ
ね・・・って

え?!うそお(´O´) 時がたつのは早いもんですなあ・・・

新一 蘭

コナンになって以来、「どうしたの」、「って蘭に聞かれるのが辛くなった。だって、

「どうしたの？」

って言われても

「何でもない」としか答えられないから。

たまに電話した時

「ねえ新一、あなた最近ずっと帰ってこないけど、どうしたの？」
って聞かれる時。 声を通してただだったらまだやり過ぎせるかもしれない。 もっと辛いのはリアルに蘭に目の前で聞かれた時だ。 解毒剤の効き目が切れて発作が蘭の目の前で起こってしまった時

「新一?! ねえ、どうしたの? ねえ、新一!!」

そうやってしきりに名前を呼ばれながら言われる時。 きれいな瞳でのぞきこまれるとついついホントのことを言いたくなってしまふ。でも、返事できるだけまだましなほうだ。

前の京都の時なんか、

「どうしたの、新一? 汗、びっしょりだよ。」

そうやって心配してもらったのにもかかわらず、俺は答えることなく麻酔銃で蘭を眠らせてしまったのだから。ごめんな、蘭

そうやって言ってみたものの、蘭は夢の中だった。何の意味もない。確かに、あの時は服部と和葉ちゃんの命がかかってたからしようがなかったかもしれない。早いとこ戻っ

て、戦いに加勢しないと、そんな気持ちが大半を占めていたことに間違いはない。でも本当にそれだけだったのかと聞かれると、それは違うとはつきり言える自信がある。

俺はあの時逃げてたんだ。蘭が真実にたどり着いてしまいそうで。何も聞かれたくなくて。

蘭の質問という雨に濡れないように、俺はいつも何でもない、という傘でその雨を弾いちまう。悪いつて分かってるんだ。これがお前の身を守るために俺が唯一出来ることだ

ってということが信じてもらえないことなんて、そんなことだって分かってる。俺が蘭の立場だって、絶対に信じないだろう。

でもこれは本当のことなんだ、蘭。お前をあいつらと少しでも関わらせたくない。俺はお前が好きなんだ。自分のせいで好きな人が傷つくの、嫌なんだよ。耐えられねんだ。

そんなこと考えたくもねえけどな、でも何があるか分かんねえ。俺が組織に狙われてるんだって分かってる以上、下手な真似してバレちまったりしたら・・・

蘭、せめてお前を守ることは許してくれ。コナンになっちまった時

も、おめえがいたから生きてこれた。絶望してた俺をここまで引き上げて光を当ててくれた。人生捨てたも

んじゃねえな、って本気で心から思えた。だからそんなお前がずっと今みたいに明るく生きてられるようにあいつから守る義務が俺にはあるんだ。

— つだけ本当に信じて欲しいのは、俺は本当に蘭が好きだ
という事。

新一 蘭（後書き）

新蘭って、一番花男の人間関係に似ているような気がするソナチネです。

といっても、リアル花男じゃなくて、逆花男ですけどネ

蘭・・・ 道明寺 司（嵐 松潤）

新一・・・ 牧野 つくし（井上真央）

哀・・・ 花沢 類（小栗旬） ね?!え、意味が分からない?

・・・そうですね、すみません。私の心の中だけにとどめておきます。

! 次回は、平次&和葉です! 関西弁バリバリ使ったんでええ!

平次 和葉（前書き）

平次&和葉編です。関西弁（大阪弁）が連発しますので、関西地域以外の方はわか

りづらい所があると思います。ご了承ください。

分からない部分があれば、いつでもお申し付けください。

平次 和葉

なあ和葉、俺もお前も鈍すぎるような気がするねん。絶対俺ら、おたがいにも、

自分自身にも隠してる事あるんちゃうやろか、って思うねん。な、そやろ？そ

う思うやろ？もしかしたら和葉はもう気付いてんのかも知れへんな。やっぱ、

女ってそうゆうことにはめっちゃ勘鋭いみたいやしな。それやったらすまん。

ずっとお前を傷つけてたことになるんやさかいな。

俺な、思ってる。「友達でも恋人でもない中間視点」ってしんどいよな、って。

俺らずっと幼馴染やんか。幼稚園入るぐらいから、いや、ちやうちやう。もっ

と前かもしれへんな。いっつも和葉が俺の傍におるんは（居るのは）普通に自

然なことやし、俺ん家来て飯食って行くっちゆうのも当たり前なことや

る？まあさすがに風呂一緒に入るっちゆうことはなかった・・・と
思うけど、

ま、まあそんなことはどうでもええねん。別に変なことしとるわけ
とちやうん

やから。(汗)ほんでな、(それでな)えっとどこまでいったんや
ったっけ？

あ、そうやそうや。それで今まで俺らずっと一緒に過してきたわ
けやねんな

。だってそうやる？俺の思い出の中には和葉が絶対おるし(居るし)
多分和葉

の記憶にも俺と一緒にいた事ってけっこうあると思うねん。

もうそこまできたらな、ほとんど家族みたいなもんやんか。和葉は
俺の妹同然

みたいな。ん？なんやと？なんであんだがあたしのお兄ちゃんなん
つてか？あ

つたりまえじゃ。お前が俺の姉気になってたまるかいな。お前みた
いなドMな

奴はなあ、俺みたいな奴におちよくられるとるのが(いじられてい
る、

要するに平次がドS行動をとるわけです。(一番似合うんじゃないボケ。
・・・)

ごめん和葉。俺いつもお前にどアホ(ど)というのは、関西弁で、最強の、

みたいな感じの意味です。(とかボケとかよう言ってますけど、ほんまはお

前のことをそんな風につつとしいって思ってるわけちゃうからな。
まあ関西

人やから、言葉きついことは和葉もじゅうぶんわかってるやろ？

でも俺はそういうきつさとはちゃうもんをお前にいっつもぶつけて
しもてると

思っねん。

お前が好きすぎてなんか自分がコントロールできへんようになるね
ん。

ほら、よお言うやろ？好きな奴おったらやたら張り切ってます奴と
か、逆に好

きな奴の顔なんかろくに見れへんゆう奴とか。

俺の場合は、好きな奴にやたら暴言をはいてまっことやねん。不器
用、なん

やるな。俺。正直自分でも呆れた。なんでこんなに近くに好きな人が居お

ったんに、俺は気付かへんかったんやろ、って。

つちゆうかな、和葉も和葉や。おまえ、今までなんで俺になんも言わへんかつ

てん。俺がクソ鈍い事はしつとるやるお前？ほんなら何で・・・え？そうか、

そうなんや・・・女子は男子に告ってほしいんか・・・知らんかつた。

しゃくないな、ほんなら和葉、よう聴いとけよ。

俺の隣にいつつもおる女はな、いつつも事件についてくるし、やかましいけど...

俺はそんなおまえのこと、ほんまのほんまに好きなんやで、和葉。

平次 和葉（後書き）

・・・平次のキャラ、見事に崩壊させてしまいました。

私的には、平・和ペアが原作の中でも一番大好きです。

私自身が関西人だから、とういうのもありますが、やっぱり子供みたいなのが

最高に面白くて、好きなんです。みなさんは、どのペアが一番好きですか？

次回、最終話は 快斗 青子 です。最後までよろしく願います。

快斗 青子（前書き）

いよいよ最終話です。

今までありがとうございました。

快斗 青子

闇の中宝石を盗むキッドになれば

「『ダイヤモンドよりも柔らかくて温かな未来』をあなたと

歩みたいのです。今宵の夜に僕とあなたと誓いの口づけを・・・」

なんて、さらっと言えるんだけどな・・・

だめだ、どうしても青子に告る言葉が思い浮かばない。青子は

幼馴染だから、伝えたいことはたくさんある。でも、幼馴染だから

こそ、すっげえ気まずい事だってある。ずっと、もっと近くに居た

い、居て欲しいと願い続けた相手なのに。今さっきは、手を伸ばせ

ば届きそうな高さの星に見えたのに、そんな、青子 という星がど

こか遠くの存在になりかけている気がする。どこか宇宙の彼方にス

ッと溶け込んでしまいそうで怖い。

でもこれは俺が決めた事。自分が決めた事を恐れるなんて、後悔す

るなんて、やってはいけないことだ。ここまできたら、もう前にい

くっきやねえだろ。

俺の指は躊躇うことなく、青子のメルアドを探していた。

もうすでに來ている青子に見つからないように、俺はゆっくりと歩を進めた。こつこつことはキッドをやってるから得意……のはずだっただけど、あと数メートルの所で青子と目が合った。にっこり笑ってこつちに來る青子がたまらなく可愛い。

「ごめん青子。こんな時間に呼び出して。親父さん、怒ってただろうっ。」

「うっん、今日はお父さん泊まりの仕事なの。だから大丈夫。でも、珍

しいね。快斗が夜に呼び出すなんて。別に青子の家に来てくれてもよ

かったのに。」

やっぱり青子は鈍い。鈍すぎる。普通分かるだろ、ここまで演出したら。

わざと、どうしたのって顔する奴もいるけど、そんな奴は一目見ただけ

で分かる。いつもより艶めかしさのあるオーラがあるから。

でも、こいつは本気で分かっている。絶対に。

「ねえ、快斗、今から何しに行くの？あ、そういえばこの前快斗、お星

様見せにどこかに連れて行ってあげる、って言ってたっけ？」

「残念だな青子。今日はそれじゃねえんだ。それはまた今度。」

俺はもう何も考えていなかった。勝手に体が動き始めちゃったから。気

付けば俺は、青子を抱きしめていた。

「快斗？」

幼さの残る瞳はキラキラ輝く。そして、その瞳の中に、俺が映っていた。

「青子、ここまでされても分かんねえか？」

「・・・今、何となく分かった。でもね、青子、快斗の口から言うてほし

いんだ。多分、青子と一緒にいる事だと思うから。」

俺は一瞬耳を疑った。初めて青子の俺に対する思いに気付いた。

「本気で言ってるのか青子。遊んでんだったら承知しねえぞ。」

「青子は本当のこと言ってるよ。でもね、青子、快斗に言ってほしいの。」

俺はもう幸せだった。ただ、青子に少し先を越されてしまった気がする。

俺の方からもちゃんと言わなきゃな。それが青子の望みでもあるんだし。

煌々(こうこう)と光る星達が今日はやけに眩しく、きれいに見える。

最高のバックステージだ。

「青子、俺さ、青子のことずっと好きだった。俺と、付き合ってくれねえか」

「うん、いいよ。青子もうれしい。」

「青子・・・愛してる・・・」

愛しているよりも大好きの方が、普段の俺を考えてみればふさわしかったかも

知らない。だけど、もうそんなのはどうでもよかった。

今の俺は、幸せすぎて、そんな事考えられなかったんだから。

快斗 青子（後書き）

初の快・青storyでした。

下手な文章だったと思いますが、

読んでいただいておりますありがとうございました。

他にもお話し書いているので、また機会があれば

どうぞよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2985n/>

Flavor of life

2011年10月7日19時30分発行